

オリエント・リース株式会社

1985年初め、オリエント・リースは、日本リースほかリース産業への新規参入企業の増大に伴って、厳しい競争に直面していた。オリエント・リースの宮内社長はこのような状況のなかで、採算を悪化させてまでもリースの売上高規模だけを競う戦略はとらないと述べていた。しかし、それと同時に、収益性の高い分野を求めて、リース事業以外の分野への多角化を進めていた。

会社の沿革

オリエント・リース（OLC）は、1964年4月に、日綿実業、三和銀行、日商岩井、東洋信託銀行、神戸銀行、日本興業銀行および日本勧業銀行によって設立された。OLCは日本リース（1963年8月設立）に続いて日本で2番目に設立されたリース会社であった。OLCにおいて、設立以来重要な役割を果たしてきた現在の乾会長および宮内社長は、当時別々の会社に勤務していた。すなわち、乾氏は1962年から三和銀行ニューヨーク支店長であり、当時のアメリカのリース産業の成長に注目して、本店に対してレポートを提出したほどで、リースを知悉していた。一方、宮内氏は、1960年にワシントン大学ビジネス・スクール修士課程を卒業後、日綿実業に就職して、社長室調査課に勤めていた。その後、1963年11月から、3カ月間、USリーシング社でのリース研修に派遣された。OLCの設立の際には、この二人ともそれぞれの親会社から新会社に派遣されることになった。とりわけ、実務研修を受けていた宮内氏は実務面の指導にあたることになった。OLCは、設立後3年目の1966年に期間損益を黒字にし、1967年には、累積損失を一掃して、早くも配当を行えるところまでこぎつけた。また、それまで、親会社から派遣されていた社長と交代して、それまで副社長であった乾氏が社長に就任した。

設立当初は、社員13人だけであり、営業は親会社である商社に依存していた。しかし、OLCのリース物件の中で事務機器の需要性が増してくるにつれて、自社営業する必要が高まってきた。一方、1969年までに、親会社からの出向社員は、OLC社員として残る人以外は、親会社に帰り、出向社員はいなくなった。1970年3月には、東京支店を世界貿易センタービルに移し、東京本社として、2本社制を敷いた。さらに、1972年12月には大阪から東京に本店登記を移した。

1980年12月には、乾氏は会長になるとともに、宮内氏が45歳でもって、社長に就任した。

(注) このケースは慶応義塾大学ビジネス・スクールでのクラス討議のために、同大学助教鈴木貞彦が公開資料に基づいて作成したものである。このケースは経営の巧拙を例示するためのものではない。(1985年2月改訂)